

私が中学一年生の時、夫を（私が四才）亡くし、病弱で手間隙のかかる、ドラ息子の子を女一つで育てながら終戦後同じように働くお母さんの手助けにと昭和二十九年十月五日に開園したあの頃を想い出して見た。

その当時は、国や県の助成もなく、下駄箱から座り机まで、建具屋さんや門徒の方達の奉仕（今で言うボランティア）のお陰で開園したところ、定員六〇名が入園希望者は一二〇名と倍の人数が集まり、下駄箱や机が不足し大変だったような事を聞いたものである。

その中で母が自慢にしていた話に、山形博導君、そうヒロ・ヤマガタ、世界的に有名なアーチストである（当時の園長で母の話、あの子は皆が走りまわっている中で満足な画用紙もないのに何時も絵を画いている、それも上手なんや、一寸絵が暗いのが気になるけどなあ）彼の絵は饒舌体だそうだ饒舌とは「おしゃべり」絵の中にふんだんにお喋りが入っていてとても面白い、窓にはブラジャーが干してあったり道路ではお巡りさんが真剣な顔で人を追っかけているとおもえば、皆が思い思いの形で遊びに参加し空には飛行船やバルーン・風船がゆったり飛び、仲間入りしたいようなお祭り気分的な雰囲気がかもし出している反面、苦悩や哀愁を表した絵もあり、侘び寂びの中に、人間らしさが浮き彫りにされている、絵は手・頭・体を通して表現され、おしゃべりや歌、悲しみや苦しみ描かれていて、彼の友人室伏哲郎がヤマガタ・ヒロミチ物語の本に保育園（本の中では幼稚園となっている）生活が書かれている。

お月さまえらいな

幼稚園のころの思い出。そう、お寺の和尚さんが亡くなって、奥さんが開いた醒井幼稚園の第一期生だった。うーん、幼稚園でいえば、メンコと銀杏と「お月さんの歌」ぐらいかな。三題断みたいだけど、ホント。

メンコは小さな丸メンコで、絵柄のキャラクターは鉄腕アトム、鉄人28号、それに、プロレスの力道山なんか。秋になると、境内一面にギンナンの実が落ちて、あれ、すごいニオイでしょう。そんなニオイの漂う中で、「丸ウンしょか」なんてフザケた。丸メンコをギンナンの潰れた園庭でやると、たちまち、あの臭気が染みついてしまうからだった。

もうひとつ、はっきり印象に残っているのは、「お月さんの歌」っていう童謡。

お袋に教わって、幼稚園の行事で歌ったら、オンチなのにすごくほめられてうれしかったんだなあ。それから、十八番のレパートリーになって、オダてられては、チヨイチヨイ歌ってたわけあれ、童謡っていつでも、普通のと違って、大正時代のお袋のこどもの時、流行ったやつじゃないかな。ちよっとメロディなんかズレてるんだけど、そこが、また、いいのね。え？ 歌え？ メロディは忘れちゃったけど、歌詞はだいたい覚えてる。あのね、お月さん、えらいな、っていうのが出だして、まるくなったり、いや違う、お月さまになったり、かな、それから、三日月さんになったりして、いつもいつも、世界中を照らしてっていうような歌だった。

別に、どうってことない歌詞んだけど、こども心に、お月さん見上げると、三日月になったり、お月見の満月になったり、夏も冬も、ああ、そうだ、たしか、春、夏、秋、冬、っていう言葉があったの思い出した。なんでも、四季いつでも、世界中を明るく照らす、お月さまは、ホントにえらいなっていう実感だった。

よほど気に入ってたとみえ、小学校に入っても、歌ってたら、また、先生にほめられ、学芸会で歌ったこともあった。ボク自身、世界のいろんな国を旅行したり、住んだりしてみた今日、振り返ってみると、こどもの時、おそろく、お月さんえらいなあ、お月さんみたいに自由に世界中を回れたらなあという願望を、なんとなく込めて歌った「お月さんの歌」が、今のボクなりにリバイバルしてるんじゃないかな、とも思うわけ。

山形氏の話で「お月さんの歌」のメロディを聞きたくなった私は、ヒロの両親を千葉県佐倉に訪ねた。

母親のとしをさんは、歌詞を正確に覚えていた童謡を、気軽に歌ってくれた。そして、博導坊の幼稚園時代の思い出で、山形氏の「三題断」の中にはなかったエピソードをひとつつけ加えてくださった。

そうですなあ、幼稚園のころから、絵を描くのは好きでしたよ。今でもよく覚えてるのは、お寺で、あの子が、スキーの絵を描きましたね。園長先生にとってもほめられたんです。五つや六つの子で、こんなふうなマフラーが風にフワッと軽く舞ってるところを、なかなか描けんし、第一、気がつかんという言葉でした。そうかと思うと、想像でしようね、見たこともない、チヨンマゲのおかしな絵を描いてみたり、そんな子でした。

なるほど。アメリカのマスコシが、"moon-faced man" (お月さまみたいな丸顔の男)と表現する、ヒロ・ヤマガタは、こどものころ、幼い想いを込めて歌った「お月さんの歌」の通り、幼稚園時代から、すでにヒラメキのあったユニークな、底抜けに陽気な「絵」で、世界中の人々の心を明るく照らしているというところかもしれない、と私は思った。

園長先生の話から

最近、自分を見失い、自己を確立する事が出来ないで悩んでいる人が多く、その人達は、建物の隅や、物陰や人気のない所で、ひっそりと自分を保ち体や心を保とうとしていると言う話を聞いた事があります。

さて、自分とは何でしょうかを考えて見たいと思います、自分とは人間が形成される中でいくつかの要素が集まって出来たものの一部分、すなはち「自らの部分」なのである、だから自分・私・我にこだわったり、主張したり、よりどころとしてしまふ不安定な心が自分なのではないでしょうか。

子ども達は毎日「帰命無量寿如来」「南無不可思議光」と唱えています、「帰命」とは自分を投げ出して大いなるものに包まれていく、「無量寿」とは、限りない命、大いなるものに包まれたもの、「不可思議光」とは人間や自分を越えた、思いはかることのできない光に照らされたもの、私の心の内にあるものでなく、私の外から私の内に働きかけられる「皆さんのご家庭と一緒に子ども側の側に居なくても何時も子どものことを心配してくださる「もの」、「如来」とは私のところに来たるものと考えられます。

先日この思いつき記を購読していただいている方から「自利利他」とはどういう意味ですかのご質問がありました、

仏教はこの自利利他の教え

であると思います、阿弥陀仏のおかげによって念仏する人が極楽浄土に往生する事が出来ることを往相回向と言ひ、極楽浄土に行っても永久にとどまらず、又人を救うためにこの世に帰って来る事が出来、又、帰ってこなければならぬこれを還相回向と言ひ、二種回向、自利利他

難しい表現ですが、

〇〇のお父さんが二七才の若さで急死されましたが、お迎えに来られた時のお父さんをお迎えに迎えて下さる頃お迎えに来られても二人がいつまでもブランコに乗ったりして、なかなか帰ろうともしない子どもを急がせずだまって見つめておられた姿を思い浮かべながら亡くなられた今も仏様となって見ていてくださる事が還相回向で、生きておられた時が往相回向だろうと想います。

いよいよ十二月（師走）、十二月と言えば私の思い出は掃除という言葉しか残らない。除夜の鐘をつく間際まで、壁やガラスを拭き、障子の貼り替えまで、その掃除も毎年、今年はまだやめたと思いがらまだ続けている。そうしなければ落ち着いて正月を迎えられないような気がする。

そして、お釈迦様のお話のシュリハンドクを思い出す。

お釈迦様のお弟子シュリハンドクに二人の兄弟がいて、兄は頭が良く、早くからお釈迦様について出家していた、弟のハンドクも、お釈迦様のお弟子になりたいと兄に話したが、「お前のような、少ない言葉も覚えられない愚かなものが仏の道を志すなんてとんでもない」とのしられ、祇園精舎の門の前で声を上げて泣いている所へお釈迦様が通りかかり励まされ、弟子になりたいのなら「ちりをはらえ、ゴミを取る。」「ちりをはらえ、ゴミを取る。」を繰り返しながら毎日朝から庭や精舎の中を掃除することが出来るなら弟子にしてあげようといはれ、ハンドクは一生懸命これを実行しているうちに、掃いても掃いてもゴミがでる、落ち葉は落ちる、この事は「ゴミもそうだが私達の心も欲・貪り・怒りが取り除いても次から次へとおそってくる、この事にきずき、お弟子になられ、勉強をされ、その後、尊者となられた。

単に知識、欲を満足させるためでもなく博学を誇るためのものではない掃除。

ただ日が一日変わるだけでお正月だから何たることはないがせめて一年の移り変わりのけじめとして今年も掃除をしようと思う。

今日十二月八日は成道会、お釈迦様が難行・苦行・断食を乗り越えて、村娘スジャータの差し出されたミルクを有り難く頂かれて、おさとりをひらかれたと伝えられている日であります。

今年も後わずか、どうぞ良いお年をお迎え下さい。

29. 1A

十二月三十一日からたった一秒変わったただけなのに、新たな気持ちになるなんて人間で不思議な動物である、そして毎年毎年、今年こそ良い年にと願いながら一年が瞬く間に過ぎて行くなかで、高度経済成長で家も良くなった。テレビ・ステレオ・自家用車も次々良いものに替えていく、レジャーも労働時間の短縮で週休二日等になり、遊ぶこと等、お金は使うことばかり。お金がなくなれば人をだます人のお金をあてにして銀行強盗をする。その為に人の生命をも簡単に奪ってしまうという非道さはいったいどこから来るのだろうか。

思えば昔、親は、朝早くから家族の人の弁当をこしらえ、洗濯・掃除・春夏秋冬には畑を耕し、夜は着る物のつくりをするという働きづめの姿がそこにあった。

今このような働きをするように、とは言えないが、せめて親がいまいききとして働いている姿、心の大切さ、お金のありがたさを示さなければいけないと思う。

私達は自分が一番偉いと思っているが、人間より尊いもの、敬うものがあることを忘れていないのではないが、それは仏様のことではないか、

では、仏様ってどんなひと？ 仏様って私が輝いている時自分も輝き、悲しい時、苦しい時一緒に悲しみ苦しみ、うれしい時一緒に喜んでくださる方、いつも私のことを大切に念<sup>おも</sup>ってくださいる方、私の心に明かりを届けてくださる宅配（仏）さん、今日も子ども達と一緒に輝きを届けて下さって有難うございます。今年も宜しく御願ひ致します

29 2月

D・N・A (Defense Nuclear Agency) 「生物の遺伝子を構成する高分子化合物とは「たんぱく質が変化すること」に起因するものである」と言う、京都大学の名誉教授 久保田競先生はシャープス（つながり）<sup>ト</sup>と云って神経細胞を繋ぎ合わす物、その数がおよそ百四十億という細胞からなっていると云うから、なんとすごいと思う。しかもこのD・N・Aは地球のあらゆる生き物（空気を必要としている）がすべて持っている。

特に人間は脳を持ちその脳の学習は生まれた時から始まる（猿や人間の脳は頭の前部分）特に前頭葉「考え・話し・行動の細胞」は人間の形成と共に一番早く作られ遅くまで働くと云う。

外から刺激を与えられる事によって色んな事を覚えて行くという、そして、このほとんどが0才から4才までにできあがるといふからもっと驚きである。

つまり、幼児期までの脳の働かせ方で、脳の働き方が決まり、知能・能力・性格が決まり、遺伝子的に決まっているのは殆どないという。ということは、天才はいないが天才は作られるという言葉が当てはまるのではないだろうか。

幼児期にどんな情報を与えるかが重要で、又、一度できたつながりは、使わないとなくなってしまうので絶えず働きかけなければならぬ、食べ物然り、体や頭の運動、動物や植物とのふれあい、家族や友達に至るまで私のシャープスを作ってくれる大切な相手とおもえばすべてが大切である。

まあ、一生勉強というわけ。

それと私自身が安心したのは、頭の悪いのは親譲りでないそう。

これから育っていく子ども達が心も体も健やかに、と念いながら大切な保育をみんなと一緒に包み込んでいこう。

29 3月

「いのちをみつめて」と言う研修会に参加し、福岡県の農業高校で、鶏を卵から雛を誕生させ育成しやがて大きくなった時点で解体してその肉を食するという所まで体験実習する高校生が「いのち」とはなにかを葛藤していく、それを指導した先生の話しを受けて、他校の高校生八人の提言や助言者によるパネルディスカッションで感動した事を今月の念い月に記してみました。

温かい種卵を先生から受け取り、ふ化器でふ化させる作業から始まるが、何よりも卵の殻を破って雛が誕生するとき、いのちの誕生の素晴らしさにみんなが感動し喜びにひたった事から始まる。

そしてえさをやり水をやりながら成長して行く鶏を見ながら、まもなく殺さなければならぬが、どうしてこの鶏を殺すのか、拳句の果てはその肉を食すると言う残酷な事業に疑問をもちながら、肉屋さんで買ったものは、どうなのか？自分が育てなければ平然と食べられるのは何なのか？を考えながら人間は動物や植物たちから「いのち」をいただかないと生きていけないという思いの中に、自分の「いのち」はこの鶏達の命を犠牲にして生きていくのではないかと、深いつながりのある生命、だからこそ、ごめんなさい、ありがとう、と生命に感謝できることを学び「いのちの教育」は「心の教育」であり「愛の教育」すなわち与えられ・支えられている生命の自覚を学びながら、恐怖で震える鶏を捕まえ解体した手は、今でも忘れられない感触が残っているのだそうだ、生命を見る目は人格性を豊かにし人生の苦しい事に向いながら道端に咲いている一輪の花にも温かいまなざしを送ることが出来る、仏教では自己中心・人間中心の見方を離れてありのままに観る力を智慧と言い、それはいのちといのちが響き合う世界であり、痛みを共感する世界（慈悲）であると学ばさしていた。だいた。

食事をするとき「いただきます」と言えるのは「みんなのいのち」ありがとうの言葉から!!!